

薪ストーブは楽しくてエコロジカル

濱 恵介

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 研究主幹

住生活との関わりでエネルギーが語られるとき、電気・ガス・灯油が「エネルギー」の主演であり、太陽エネルギーなどの再生可能エネルギーは、補助的・趣味的な扱いされているように感じています。自然光によってモノが見え、植物が成長し、太陽熱と大気や潮流のバランスで気温が保たれていることなどは、当然すぎて意識されないのかもしれませんが。

自然のままのエネルギーでは照明、給湯、調理などに使いにくいので、便利な電気やガスを使う訳ですが、結果として資源枯渇、地球温暖化、放射性廃棄物など大変な問題が生まれました。一方、太陽エネルギーがクリーンで無尽蔵と言っても、そのままでは蓄えができず強力な火力も得られません。その点、バイオマスは「貯蔵された太陽エネルギー」と言えます。なかでも焚木は人類が有史以前から頼りにしてきた燃料なのに、ここ数十年は時代遅れのエネルギー源のように扱われてきました。

さて、私の家は築30年近い中古物件をいわゆる「エコ住宅」に改修したもので、エネルギー消費による環境負荷を減らす様々な工夫がされています。建築の断熱性と蓄熱性を高めるとともに、再生可能エネルギーを活用する設備を導入しました。太陽光発電設備、太陽熱温水器、そして薪ストーブです。薪ストーブは化石燃料・核燃料に頼らない暖房装置であり、木が燃える炎の雰囲気は格別です。焚木を燃せる楽しみで、嫌だった冬の到来が待ち遠しくなりました。

薪ストーブについてよく受ける質問があります。「焚木を燃せば炭酸ガスが出るが環境に良いのか」、「焚木はどこで手に入れるか」そして「灰の処分はどうしているか」です。第一の質問には、「焚木は太陽エネルギーの缶詰で、森が健全に維持される限り大気中のCO₂は増えない」と説明せねばなりません。次の質問はもっともです。私は山持ちの知り合いから間伐材を、木材加工所から端材を分けてもらうほか、植木の剪定枝を利用しますが、木質エネルギーの復活には利用しやすい流通経路が必要でしょう。第三の質問、灰の行き先は私も少し悩みます。今のところ庭や畑に撒いていますが、理想的な処分ではありません。何故なら、炭素は大気を介し光合成によって再び森へ戻りますが、樹木が土壌から吸収したミネラル分は、循環が断たれるからです。本来は森へ戻すべきものなので、本当のエコ燃料とするには、焚木の流通経路と並行して灰が元に戻る静脈ルートが必要と思われます。

薪ストーブとの付き合いで、いくつかの新鮮な発見がありました。火を通じた木と土の循環を実感できること、焚木を準備し上手に燃すなど手間をかけることが喜びであり生活の質を高めること、暮らしの中の火(fire)が家庭(foyer)の中心(focus)になること、などです。

エコロジカルな住生活には、再生可能エネルギーを優先的に利用し電気・ガスなど在来型のエネルギーがその弱点を補う、というエネルギーシステムが必要でしょう。そこには経済合理性だけでは説明のつかない納得や満足感という要素が不可欠のように思われるのです。

連絡先：大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 〒541-0051 大阪市中央区備後町3-6-14

電話：06-6262-8424 FAX：06-6262-8422 e-mail：k-hama@osakagas.co.jp